

---

「京都市立新設高校創設プロジェクト」に関する  
第1回有識者会議  
次 第

平成27年8月20日 9:30~11:30  
(於 西京高校 3階会議室)

---

(司会) 学校指導課 川浪首席指導主事

1. 開会の挨拶 (大黒指導部担当部長)
2. 委員紹介 (司会)
3. 経過説明、検討スケジュールについて (辰巳課長補佐)
4. 「塔南高校の歩みと現状」について (塔南高校)
5. 中間まとめ (案) の報告 (末房指導主事)
6. 塔南高校あり方構想委員会報告 (塔南高校あり方構想委員会)
7. 意見交換
8. 閉会の挨拶 (大黒指導部担当部長)

# 「京都市立新設高校創設プロジェクト」に関する 第1回有識者会議

## 資料

資料1 「京都市立新設高校創設プロジェクト」設置要綱

資料2 「京都市立新設高校創設プロジェクト」に係る検討委員について

資料3 京都市立洛陽工業高校跡地における「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」について

資料4 検討内容とスケジュールについて

資料5 「塔南高校の歩みと現状」について

資料6 「中間まとめ（案）」について

資料7 塔南高校沿革

## 「京都市立新設高校創設プロジェクト」設置要綱

### (趣旨及び設置)

第1条 京都市立洛陽工業高校跡地における「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針（平成27年6月策定）（以下、基本方針という。）」に基づき、新しい普通科系高校（以下、新校という。）の創設に向けた研究・協議を行うため、「京都市立新設高校創設プロジェクト（以下、プロジェクトという。）」を設置する。

### (組織)

第2条 プロジェクトは、プロジェクト委員（以下、委員という。）をもって組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから、教育長が任命する。

- (1) 京都市立高等学校長会の代表者
- (2) 京都市立中学校長会の代表者
- (3) 京都市教育委員会事務局指導部担当部長
- (4) 同 指導部学校指導課（以下「学校指導課」という。）の職員
- (5) その他教育長が必要と認める者

### (委員)

第3条 委員の役割は、次のとおりとする。

- (1) 基本方針に基づく、新校に関する調査、研究または協議
- (2) その他学校指導課長が必要と認める事項

2 委員の任期は、任命の日からプロジェクトの終了までとする。

### (会議)

第4条 委員による会議は（以下、会議という。）、学校指導課長が招集し、学校指導課の職員が進行する。

2 会議は、原則公開しない。ただし、第5条に規定する有識者や関係者（以下、有識者等という。）を招く際に、学校指導課長が必要と認める場合は、これを公開することができる。

3 会議の傍聴に関し必要な事項は、学校指導課長が別に定める。

### (関係者の出席)

第5条 会議には、第2条で定める委員のほか、有識者等を招き、意見等を求めることがある。

2 学校指導課長は、議題に応じ、京都市教育委員会事務局及び教育機関の職員に対して会議への出席を要請することがある。

### (庶務)

第6条 プロジェクトの庶務は、学校指導課が行う。

### (補足)

第7条 この要綱に定めるもののほか、プロジェクトの運営に関し必要な事項は、学校指導課長が別に定める。

### 附則

この要綱は平成27年7月1日から施行する。

「京都市立新設高校創設プロジェクト」に係る検討委員について

1. 有識者

氏名	役職等
北川 進	京都大学物質一細胞統合システム拠点長 京都大学大学院工学研究科教授
溝上 慎一	京都大学高等教育研究開発推進センター 教授
武田 靖史	村田機械株式会社 取締役 業務支援本部 本部長
今野 圭子	中学校PTA代表 (京都市立中学校PTA連絡協議会庶務・近衛中学校PTA会長) ※第1回有識者会議は今野氏が御欠席のため、代理で京都市立中学校PTA連絡協議会会計・久世中PTA会長の今村志津子氏が御出席
村上 久明	高校PTA代表 (京都市立高等学校PTA連絡協議会会长・西京高等学校PTA会長)

2. 「京都市立新設高校創設プロジェクト」委員

氏名	役職等
古池 強志	京都市立塔南高等学校 校長
村上 英明	京都市立西京高等学校 校長 (京都市立高等学校長会代表)
田邊 美野利	京都市立七条中学校 校長 (京都市立中学校長会代表)
大黒 喜裕	京都市教育委員会 指導部 担当部長
三宅 慎一	同 指導部学校指導課 担当課長
川浪 重治	同 指導部学校指導課 首席指導主事
辰巳 敏秀	同 指導部学校指導課 課長補佐
末房 和真	同 指導部学校指導課 指導主事

※その他、オブザーバーとして、塔南高校の教職員からなる「塔南高校あり方構想委員会」のメンバーも適宜会議に出席（下表）

氏名	役職等
沓谷 恵子	京都市立塔南高等学校 教頭
正木 廣樹	同 主幹教諭
黒澤 寛己	同 教諭
松田 尚久	同 教諭
飯島 弘一郎	同 教諭

## 議第5号説明資料

平成27年6月4日  
学校指導課

京都市立洛陽工業高校跡地における  
「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」について

平成28年4月の京都工学院高校の開校に伴い、洛陽・伏見工業高校の在校生は開校初年度は両校の現在地に通学することとなるが、平成29年度には京都工学院高校の校地に移り学校生活を送ることとなる。

これにより平成29年度以降に活用が可能となる洛陽工業高校の跡地に関して、平成26年8月に洛陽工業高校の同窓会である洛陽京工会から「洛陽跡地は学校施設として活用してほしい」旨の要望書が、同年11月には、塔南高校の同窓会、PTA役員経験者等で組織されている愛校会、PTA、塔南高校の4団体（以下、「塔南高校関係4団体」）から「洛陽工業高校跡地へ塔南を移転させてほしい」旨の要望書がそれぞれ教育長へ提出された。

これらの要望内容を踏まえるとともに、洛陽工業高校の跡地に塔南高校を移転することにより、塔南高校を取り巻く様々な課題を解決し、より充実した教育環境の下で最先端の高校教育を展開できるようになることから、以下のとおり「京都市立洛陽工業高校跡地における新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」を策定し、次代を担う新しい普通科系高校の教育内容や学校規模、施設設備についての検討を進めていく。

**1 議案「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」について**

別添議第5号のとおり

**2 塔南高校を取り巻く課題**

(1) 立地条件

最寄駅であるJR西大路駅から徒歩20分以上かかる立地にあり、また市バスについても塔南高校の最寄停留所には1時間に1本程度しかバスが停車しない等、交通の利便性について極めて大きな課題がある。

(2) 耐震化の課題

建物全体の延べ床面積(7,733m<sup>2</sup>)のうち、約7割(面積比)にあたる5,331m<sup>2</sup>が耐震補強を要する建物であり、全ての普通教室、管理諸室、大半の特別教室が含まれている。

また、耐震補強工事を実施する場合は第一グラウンド（主に野球部、保健体育の授業で使用）の半分程度を使って延べ床面積約4,200m<sup>2</sup>のプレハブ(2階建3棟)を1年半程度設置する必要があり、莫大な費用と同時に部活動等に多大な支障が生じる。

さらに、耐震補強を要する建物は、全て昭和38年に建築されており、築50年以上を経過していることから、耐震補強工事を行ったとしても近い将来、建替えが必要となる。

(3) 校舎面積

生徒一人あたりの校舎面積は8.0m<sup>2</sup>であり、市立高校9校のうちで最も狭隘な状況にある。なお、仮に現敷地で校舎面積を現在よりも多く確保する場合、現建物敷地

内ではスペースを確保できないため、第1グラウンドを建物敷地とする等の方策が必要となり、教育活動へ多大な影響を及ぼすこととなる。

(塔南高校を除く普通科系高校4校(西京、堀川、日吉ヶ丘、紫野)の平均校舎面積:12.9m<sup>2</sup>/人)

### 3 関係団体からの要望書

#### (1) 洛陽京工会(洛陽工業高校の同窓会)からの要望内容

- ① 新工業高校での教育内容の充実(実践技術者育成と理数系大学進学)
- ② 再編後の洛陽工業高校跡地の学校施設としての活用
- ③ 現校地にある創立百周年記念館の存続

#### (2) 塔南高校関係4団体(※)からの要望内容

- ① 洛陽工業高校跡地への塔南高校移転
- ② 移転後新校への最新施設・設備の整備

※ 同窓会、愛校会、PTA、学校。愛校会とはPTA役員経験者等を中心とした奨学生授与や親睦を目的とした組織。

### 4 施設状況等

学校名	洛陽工業高校	塔南高校
所在地	南区唐橋大宮尻町22	南区吉祥院観音堂町41
開校年度	明治19年	昭和38年 ※ 洛陽高校・伏見高校(当時)の普通科生徒と新入生を受け入れて開校
生徒数 (H27)	418名 1年5クラス、2年6クラス、 3年6クラス	754名 1年7クラス、2年6クラス、 3年6クラス (うち各1クラスが教育みらい科※)
敷地面積	建物面積 20,500m <sup>2</sup> 運動場 11,599m <sup>2</sup>	建物面積 9,340m <sup>2</sup> 運動場 14,968m <sup>2</sup> (第一グラウンド) 7,402m <sup>2</sup> (第二グラウンド) 7,566m <sup>2</sup>
校舎延床面積	校舎面積 20,505m <sup>2</sup> 屋体面積 1,790m <sup>2</sup>	校舎面積 6,053m <sup>2</sup> 屋体面積 1,680m <sup>2</sup>
アクセス	JR西大路駅から徒歩約5分	JR西大路駅から徒歩約20分

※ 教育みらい科は、次代の教育を担う優秀な人材を育成することを目指す全国初の教員養成専門学科。平成19年4月設置。

### 5 今後の予定

今後、塔南高校の教職員、教育委員会及び中学校・高等学校長会で構成するプロジェクトを組織し、教育構想を具体化していく。検討の過程において、適宜、有識者や保護者の方等から御意見をいただく。

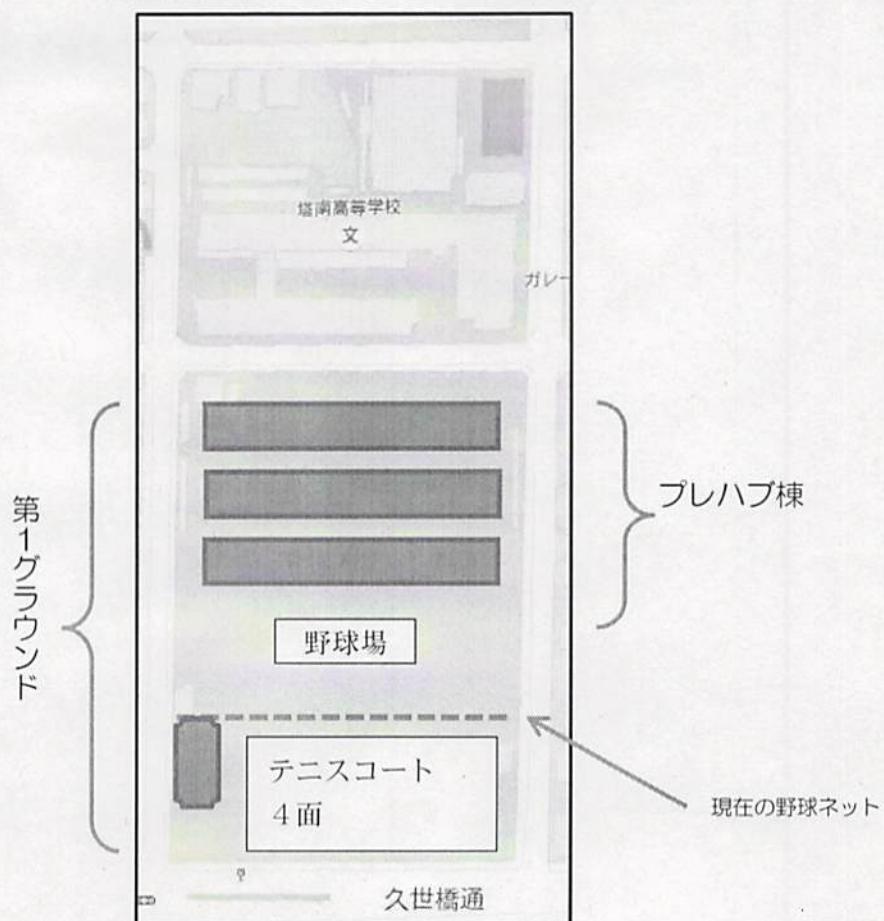
さらには地域の方々をはじめ関係者からもご意見をいただき、今秋頃に「中間まとめ案」を作成し、市民意見募集を経て、今年度中に「まとめ」を作成する予定。

## 6 参考

### (1) 洛陽工業高校と塔南高校の位置関係



### (2) 耐震補強工事に伴うプレハブの設置イメージ



議第5号

京都市立洛陽工業高校跡地における  
「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」について

京都市立洛陽工業高校跡地における「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」を別紙のとおり定める。

平成27年6月4日

京都市教育委員会

## 京都市立洛陽工業高校跡地における 「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」

新しい普通科系高校（以下、新・普通科系高校）の創設に向け、下記の基本方針の下、教育内容や施設設備等の在り方について検討を進める。

### 記

#### 1 新・普通科系高校の創設に向けた考え方と方向性について

洛陽工業高校の跡地に関しては、平成28年4月の京都工学院高校の開校に伴い、平成29年度以降に活用が可能となる。平成26年8月に洛陽工業高校同窓会である洛陽京工から「跡地の学校施設としての活用」要望が、また同年11月には塔南高校同窓会、愛校会、PTA、塔南高校の4団体から「立地、施設の老朽化や狭隘な状況等の課題解決に向け、洛陽工業高校跡地への移転」要望がそれぞれ教育長へ提出された。

塔南高校は、昭和38年、それまで普通科、工業科を併置していた洛陽高校及び伏見高校の普通科生徒を受け入れる形で設立されたものであり、洛陽工業高校と非常に深い所縁があり、こうしたことを踏まえるとともに高校教育に対する市民の高いニーズに応えることができることから、洛陽工業高校の跡地に塔南高校を移転・再編し、新・普通科系高校を創設する。

#### 2 目指す生徒像・学校の基本コンセプトについて

新・普通科系高校では、日本が目指す科学技術イノベーション立国の姿を見据えるとともに、塔南高校において教育界をはじめとする様々な分野で活躍する生徒を育んできた教育風土をしっかりと引き継ぎ、多様な分野で「社会に貢献する生徒の育成」を学校の最高目標とする。併せて、地域や企業、小・中学校と連携した教育実践や生徒の主体性や自律性を育んできた教育風土を継承・発展させ、学校教育と実社会とのつながりを重視した教育活動を開拓し、「国際的な視野を持って主体的に社会に参画し、自立して社会生活を営むために必要な力」の育成を目指した学校づくりを行う。

##### (1) 目指す生徒像

- ① 自らの将来像を描き、その到達に至る道筋と達成すべき課題を明確にして、目標の実現に向けチャレンジし続ける生徒
- ② 在校生はもとより、小・中学生や地域の方々等、世代や立場を超えた人々とも積極的に交流し、他者と協働して活動できる力を培い、多様な価値観や生き方を学びながら、自己の成長につなげることができる生徒

- ③ 國際化や情報化の進展する社会において、地域や社会の課題を多角的にとらえる視野を育み、科学技術分野や教育分野をはじめとする多様な分野で社会に貢献する気概を持って、社会的課題の解決や新しい価値の創造に向けて行動し、社会の発展に寄与することのできる生徒

## (2) 学校の基本コンセプト

- ① <生徒が主体的・自律的にいきいきと活動する学校>

学習活動はもとより、生徒会活動や部活動などすべての教育活動において生徒が自発的に、意欲をもって全力で取り組める環境を提供する学校

- ② <地域に貢献し地域とともに発展する学校>

地域の小・中学校との連携事業を継承・発展させるとともに、地域でのボランティア活動や伝統行事などに生徒が積極的に参画することを通して、地域の発展に貢献するなど、地域と共に歩む学校

- ③ <生徒の持つ可能性を引き出し、高める学校>

生徒が成りたい自分を描きながら、夢や希望を持って学校生活を送れるよう、個の可能性を最大限に引き出し、その実現に向けて、一人一人を徹底的に大切にする学校

## 3 教育構想の具体化について

今後、塔南高校の教職員、教育委員会及び中学校・高等学校長会で構成するプロジェクトを組織し、「目指す生徒像」の下に「学校の基本コンセプト」を具体化するため、次の観点を基に検討する。

なお、検討の過程において、適宜、有識者や保護者の方等から御意見をいただく。

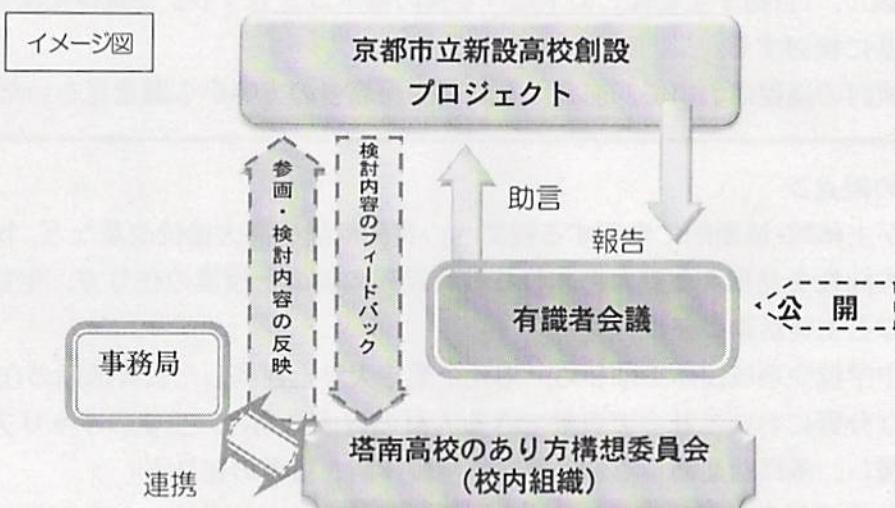
### <検討の観点>

- ① 生徒が主体的・協働的に学習する授業への質的転換や高大接続改革など、国での教育改革の方向性を見据えた魅力あふれる教育課程の編成と授業の在り方、生徒会活動や部活動など生徒活動の在り方
- ② 小・中学校や地域団体をはじめ、地元企業や大学と連携した教育活動の在り方
- ③ 多様な分野において社会で貢献できる人材の育成に向け、生徒のキャリア発達を適切に支援し、多様な進路希望を実現する学校体制と指導の在り方
- ④ 新しい教育活動を展開するにふさわしい普通教室や特別教室、ICT 機器をはじめ、幅広い学習活動や部活動を展開するための施設・設備や学校規模の在り方

## 「新・普通科系高校」に関する検討内容とスケジュールについて

### 1 検討組織について

- (1) 「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」に基づき、学校現場と教育委員会が参画する「新設高校創設プロジェクト」を発足し、学識者等で構成する「有識者会議」からの意見を適宜いただきながら、新・普通科系高校の教育構想等（理念・学校規模・教育システム等）及び施設整備のあり方を具体化する。
- (2) 会議を公開として、市民に開かれた議論を進めていくため、学識者や企業者、保護者等が参画する「有識者会議」を公開で実施し、本プロジェクトに対する専門的な助言をいただく。
- (3) あわせて本年4月からは、塔南高校内に「塔南高校のあり方構想委員会」（以下、あり方構想委員会）が発足し、管理職に加え、主幹教諭をはじめ、中堅・若手教員4名を委員として、毎週1回塔南高校の将来構想について議論を進めている。学校としての教育改革の議論と新校への要望をまとめている。
- (4) 塔南高校の意見を反映していくため、塔南高校校長は委員として、あり方構想委員の教員はオブザーバーとして、プロジェクトに参加する。
- (5) あり方構想委員会での議論も踏まえながら、事務局で中間まとめ案を作成し、プロジェクト及び有識者会議で議論を進めていく。



## 2 議題と検討スケジュールについて

日 稲	会 議	内 容
7月1日	第1回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経過説明、今後の予定説明</li> <li>・塔南高校の現状と課題の報告</li> <li>・「中間まとめ（案）」の方向性の確認</li> <li>・教育課程と授業のあり方</li> <li>・生徒主体の活動、部活動のあり方</li> <li>・地域連携等、具体的な教育活動の特色</li> <li>・学校体制と指導のあり方</li> <li>・普通教室、特別教室のあり方</li> <li>・ＩＣＴ機器等、特色ある教育活動を支える施設のあり方／屋内体育館やグラウンド等のあり方</li> <li>・学校規模のあり方 等</li> </ul>
7月28日	第2回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中間まとめ（案）」の方向性の検討</li> </ul>
	事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中間まとめ（案）」の作成</li> </ul>
8月20日	第1回 有識者会議（公開）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの経過説明</li> <li>・「中間まとめ（案）」について意見交換</li> </ul>
	事務局・学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域団体、同窓会からの意見聴取</li> </ul>
9月～10月	第3回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有識者会議・地域等からの意見を受けて「中間まとめ（案）」の検討</li> </ul>
11月	第2回 有識者会議（公開）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修正箇所の確認</li> <li>・「中間まとめ（案）」の検討</li> </ul>
12月	第4回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>「中間まとめ（案）」の検討</li> </ul>
1月	第3回 有識者会議（公開）	<ul style="list-style-type: none"> <li>「中間まとめ（案）」の最終検討</li> </ul>
	事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中間まとめ」策定、市民意見募集の実施に関して報告（教育福祉委員会報告、教育委員会報告）</li> <li>・2月頃から1ヶ月 市民意見募集（パブコメ）</li> </ul>
3月	第5回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パブコメ報告</li> <li>・「まとめ」の検討</li> </ul>
4月～5月	事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「まとめ」策定 (教育福祉委員会報告、教育委員会報告、広報、地域・同窓会・中高校・府への報告)</li> <li>・有識者会議委員には個別報告</li> </ul>

平成 27 年 8 月 20 日  
京都市立塔南高等学校  
校長 古池 強志

## 塔南高校の歩みと現状

### 1. これまでの歩み

本校は、戦後第 1 次ベビーブーム世代の高校生急増期に対応するため、昭和 38 年に創立された。洛陽・伏見両校の普通科 2, 3 年生を受け入れ、全日制普通科単独校としてスタートした。創立当初の通学区域は、北は淳風・豊園・開智の四条通り近辺から、南は神川・下鳥羽・横大路まで広範囲に渡り、京都市南部の商業地域・工業地域、また、農業地域に住む子弟を受け入れてきた。設立当初こそ就職者数が非常に多かったが、社会情勢の変化を受け、次第に進学志向が高まっていった。

平成に入って、学力向上・進路実現の取組強化が始まり、平成 3 年度には現役国公立大学合格者が 44 名（京都市内公立高校トップ）、平成 5 年度には 74 名（京都府下公立高校トップ）となった。

しかし、平成 8 年の嵯峨野高校京都こすもす科、平成 11 年の堀川高校人間探求科・自然探求科を始めとして、京都府全域から生徒を受け入れる専門学科が次々と新設され、中学生の志望動向が大きく変化する中で、塔南高校の進路実績は低迷することとなった。

そこで平成 17 年度に第 2 次改革が始まる。4 ターム制、全てのクラスで毎日 45 分 × 7 限授業をスタートし、さらに 3 年次には、進路に応じた多彩な選択科目を用意する“プリフィックスカリキュラム”と第 2, 3 タームでの 8・9 限授業（自由履修）を導入した。

平成 19 年度には、改革の完成年度としての取組に加えて、日本初の教員養成系専門学科「教育みらい科」（1 クラス 40 名）が設置され、教育課題探究や近隣の小学校での現場実習など、教員に必要な資質を身につけるための特色ある取組が展開された。

平成 20 年度から始まった部活動の活性化に加えて、平成 21 年度から生徒指導の立て直しが図られ、部活動と生徒指導を両輪として、「文武一貫」をキーワードに校内の規律と学習環境が整えられていった。

選抜制度改革により、平成 26 年度入試から京都市・乙訓地域においても単独選抜に移行した。普通科の前期選抜では、硬式野球、陸上競技、吹奏楽を中心とする部活動と学習との両立を目指す生徒を求めた。本校を第 1 志望とする生徒が入学生のほとんどを占めるようになり、入学生的出身中学は遠くは園部・亀岡、木津・精華町にまで広範囲に及んでいる。生活指導が一定浸透し、始業前の「朝学習」にも真剣に取り組むなど、学年団の主体的な働きかけの積み重ねで、学習に対する意欲を高めているところである。

## 2. 塔南高校の現状

### (1) 文武一貫教育

平成20年頃より、運動部を中心とする各部活動において、挨拶や身だしなみを始めとする生活規律の徹底や清掃活動等の取組がなされるようになった。それと同時に生徒指導部でも徹底した生徒指導・生活指導を行った。染髪・ピアスを許さず、自転車マナーを守らせ、授業時間中は常時教員による校門当番を実施して遅刻防止と無断外出禁止を徹底し、各部活でもこれらを十分に指導した。すると、学校全体に規律遵守のムードと活気が生まれ、部活動を目的として本校を志望する生徒も増加した。

そこで打ち出されたのが「文武一貫」の旗印である。これにより、平成17年度からの「全員、毎日45分×7限」に、「部活動の時間の保障」・「全員が揃って部活へ」という意味が付加されることとなった。部活動単位で練習後の自習教室を確保したり、学習塾と提携した補習を行うなど、様々な工夫が始められた。

こうした部活動を中心とした生活指導と学習指導の推進によって、現在の落ち着いた学習環境が整備されていった。

さらに、教育みらい科と普通科特別進学コースでは、月1回程度、土曜午前に「土曜塾」を行っている。入学当初から、オンライン学習教材を導入し国語・数学・英語の自学自習を進めているが、その内容の定着度を測るため、「土曜塾」で確認テストを行う。また、1、2年生では学年単位で毎日「朝学習」を実施するなど、学習習慣の定着と学習意欲の向上を図り、文武一貫教育の充実を図っているところである。

「文武一貫」を掲げる一方で、部活動に参加しない生徒も一定数存在する。こうした生徒に対していかにアプローチし、学業や学校に意識を向けさせるかが課題となっている。

### (2) 教育みらい科

教育みらい科は、教師に求められる「知性」「志」「実践力」の基礎を育成する専門学科として平成19年に設置され、今年度で9年目を迎えた。生徒は将来教師を目指し、同じ志を持った仲間と様々な取組を通してお互いに刺激を与え合い、人間関係形成力を高めている。

「人間学Ⅰ・Ⅱ」、「教育チャレンジⅠ・Ⅱ」といった専門科目の代表的な取組として、2年次の「教育課題探究」と「小学校現場実習」がある。「教育課題探究」においては、各々の生徒が自ら興味や疑問を持った教育問題に対して仮説をたて、検証し考察を深め、その成果はポスターセッション形式で発表する。また、「小学校現場実習」においては近隣の祥栄小学校の協力を得て、グループ単位で実際に教壇に立ち児童に対して授業を行う。本校の教員だけでなく、小学校の先生からの助言や指導も受けながら、指導案を作成し授業に臨む。これらの取組を通して、生徒は自らの考えを言葉で伝える表現力や課題解決のために集団で議論を進めるコミュニケーション能力を高めている。

志願者数の推移は<表1>の通りである。また、1~6期生（計246名）の進路（合格）状況は<表2>の通りである。

<表1>



<表2> 1~6期生（246名）の進路（合格）状況

国公立大学	51名	約21%	※ほぼ教育系学部・学科へ進学
私立大学（連携協定校）	42名	約17%	
私立大学・短大（上記以外の教育系）	60名	約24%	
私立大学（教育系以外）	61名	約25%	
専門学校	18名	約7%	
就職・その他	16名	約7%	
※教員免許取得を目指す卒業生（保育士を含む）148名（約60%）			

教育みらい科1・2期生の卒業生のうち25名が教員として活躍し始めている。また、直近2年間の京都市教員採用試験における大学新卒の受験者のうち、教育みらい科出身者とそれ以外の合格率を比較すると、教育みらい科出身者が約33%、それ以外は約17%であり、教育みらい科出身者の健闘がうかがえる。

### （3）普通科

平成17年度から普通科生徒の多様な進路希望に対応するため、45分7限授業、プリフィクス・カリキュラムを導入した。しかし、平成19年度より教育みらい科を設置し学校体制が大きく変化したこと、多様な講座授業を開設するのに必要な教室が十分でないことなどから、平成21年度から現在のカリキュラムに変更することとなった。

平成26年度より、類型制が廃止されたことに伴い、普通科を国公立大学や難関私立大学進学を目指す「特別進学コース」と、基礎学力の充実を図り中堅私大進学を目指す「普通進学コース」の2コース編成に変更した。

特別進学コースは、35単位という単位数を生かして、1年次に「化学基礎」、「生物基

「基礎」の理科 2 科目を配置し、2 年次から文系、理系に分かれて、それぞれの進学に対応した科目を増単位して学習している。

現在の学級編成は、1 年生が特別進学コース×2 クラス（計 63 名）、普通進学コース×5 クラス（計 177 名）、2 年生が特別進学コース×2 クラス（計 59 名）、普通進学コース×4 クラス（計 140 名）、3 年生がⅡ類×1 クラス（40 名）、Ⅰ類×5 クラス（計 154 名）となってい

#### （4）総合的な学習の時間

平成 17 年度から、「知る」（1 年）、「考える」（2 年）、「表現する」（3 年）をテーマとして取り組まれてきたが、「総合的な学習の時間」（以下、「総学」）のプログラムや評価を統括する主体が定まらず、取組を検証し継承・発展させていく方向には進んでいかなかった。

平成 24 年度以降は、「自己のキャリアを見据えさせ、前提としての基礎的な学力をつけてうえで、自己理解を深め、社会における自己の在り方生き方の考察を深める」ことを目標に、類型・コースに応じて取り組んでいる。

1 年生は、「総学」担当者が、キャリア教育の観点から視聴覚教材を用いた「職業理解」「進路実現」に関する独自の授業を展開している。さらに、基本的な学習習慣の定着を図るために教科横断型の学び直し教材や自学自習教材を用いて基礎学力の向上にも取り組んでいる。2 年生は、自己理解や他者とのコミュニケーション能力を高めることを目的に、独自教材を用いて、担任と進路指導担当者がチームティーチングを行っている。また、6 月から 11 月にかけては、教育系 NPO 法人と共同開発したキャリア教育ワークショップを実施している。

3 年生は、地歴・公民科教員が担当し、時事問題の調査発表や就労観の交流、国際貢献の在り方に関する考察などを通して、現代社会に生きる日本人として必要な資質を養っている。

#### （5）進路

直近 3 年間の進路実績は＜表 3＞の通りであり、国公立大学・私立大学ともに増加傾向にある。

＜表 3＞

	H25. 3 卒	H26. 3 卒	H27. 3 卒
国公立大学	8	11	15
私立大学	213	222	240
うち、関関同立	14	20	20
うち、産近佛龍	50	61	77

今年度からは、「学年主導体制」が敷かれた。学年団を中心に、教科指導を行うチームを作り、その学年の教科指導の責任を負う。特に、各学年の教育みらい科、1、2年年の普通科特別進学コース、3年のⅡ類については、学年団と教科が中心となって、模試分析や学力向上の取組を立案し実行している。学年団に配置された学年副主任と学年担任各1名は、学年主任とともに学年全体の運営・各分掌との調整等を担当しており、学年団全体で意欲的な取組が始まっている。

#### (6) 部活動

部活動は現在、体育系 14（硬式野球、陸上競技、サッカー、男子バレー、女子バレー、男子バスケットボール、女子バスケットボール、テニス、ソフトテニス、バドミントン、新体操、水泳、剣道、弓道）、文化系 9（吹奏楽、華道、茶道、書道、美術、地学、演劇研究、新聞、放送）の合計 23 の部が活動している。そのうち、硬式野球部、陸上競技部、吹奏楽部の3部だけで全校生徒の約 3 分の 1 を占める。平成 27 年度 5 月 1 日現在の部活動加入率は、1 年生 81.2%（前期選抜合格者の加入率は 100%）、2 年生 79.5%，3 年生 65.7% で、全体では 75.9% である。

#### (7) 選抜

平成 21 年度入試から、特色選抜が導入され、部活動実績のある生徒が多く入学するようになった。実績のある硬式野球部、陸上競技部、吹奏楽部を中心に、学校全体で部活動が活発化した。文武一貫の取組により、部活動で優れた実績を上げる生徒が国公立大学への進学を果たす例もある反面、家庭学習の時間が十分に確保できない生徒もあり、学習面での活性化が課題となっている。

平成 26 年度入試からは単独選抜に移行したが、前期選抜の受検倍率は 3 倍、中期選抜の受検倍率は 1.35 倍となり、中学生・保護者からの一定の支持があることが示された。志願者の出身中学校を見ると、以前は地元中学校を中心に南通学圏からの志願者が多かったが、北通学圏からの志願者も増え、出身中学校数は 56 校（平成 25 年度 46 校）に増加した（北通学圏は平成 25 年度 12 校から平成 26 年度 17 校に増加）。平成 27 年度入試については、普通科前期選抜の受検倍率が 2 倍に下がるなど不安材料もあったが、学力面では現 2 年生と変わらない生徒層が入学している。

新・普通科系高校創設に向けての「中間まとめ（案）」

平成27年8月  
京都市立新設高校創設プロジェクト

## 目次

1 新・普通科系高校の創設に向けて	… 1
2 新・普通科系高校の目指す生徒像・学校の基本コンセプトについて	… 3
(1) 目指す生徒像について	
(2) 学校の基本コンセプトについて	
3 学校規模と施設・設備の在り方	… 6
(1) 学校規模について	
(2) 施設・設備について	
4 教育方針の一層の具体化に向けて	… 8

## 1 新・普通科系高校の創設に向けて

京都府内の私立高校が大学進学への取組を強め、市民の私学志向が強まる中、本市においては家庭の経済条件に関わらず子どもたちの進路希望を実現していくことを目指し、平成11年に堀川高校をパイロット校と位置づけて「人間探究科」「自然探究科」を開設した。以降、常に時代の変化を見据え、生徒一人一人の個性の伸長と進路希望の実現を図るため、市立高校の各校が創意工夫を凝らした特色ある教育活動をこれまで展開してきた。こうした中、平成28年4月には将来の日本の「ものづくり」「まちづくり」をリードする担い手の育成を目指して、洛陽工業高校と伏見工業高校を再編・統合した京都工学院高校を開校する。

これにより、平成29年度以降に活用が可能となる洛陽工業高校の跡地に関しては、平成26年8月に洛陽工業高校同窓会である洛陽京工会から「洛陽工業高校の跡地は学校施設として活用して欲しい」旨の要望が、また同年11月には塔南高校同窓会、PTA役員経験者などで組織されている愛校会、PTA、塔南高校の4団体から「立地、施設の老朽化や狭隘な状況等の課題解決に向け、洛陽工業高校跡地へ塔南高校を移転させてほしい」旨の要望がそれぞれ教育長へ提出された。

塔南高校は、生徒急増期にあった昭和38年、当初は中学校として計画されていた施設を転用し、それまで普通科と工業科を併置していた洛陽高校、伏見高校両校の普通科生徒を受け入れる形で全日制普通科単独校として開校した。これまで熱心な学力向上の取組によって、教育界をはじめとする様々な分野で活躍する卒業生を数多く輩出している。また、平成19年には教師として求められる「知性」「志」「実践力」を高校段階から育成する全国初の教員養成系専門学科として「教育みらい科」が設置された。生徒たちは同じ志を持った仲間と実践的な取組を通して互いに刺激し合い、教師として必要な資質・能力の基礎を培っている。一方、交通の利便性に課題がある他、設置の経緯から生徒一人当たりの校舎面積は市立高校で最も狭隘であり、また、建物全体の約7割(床面積比)が耐震補強を要し、築50年以上を経過している教育環境にある。

こうした状況を踏まえるとともに、より充実した教育環境の下で最先端の高校教育を展開できるよう、現在の塔南高校を洛陽工業高校の跡地に移転・再編し、新しい普通科系高校を創設する「京都市立洛陽工業高等学校跡地における『新しい普通科系高校の創設に関する基本方針』」(以下、基本方針という)を平成27年6月に策定した。現在、基本方針の具現化に向けて、教育委員会、中学校・高等学校長会および塔南高校の教職員で構成する京都市立新設高校創設プロジェクトを設置し、次代を担う「新しい普通科系高校」(以下、新・普通科系高校という)の教育内容や学校規模、施設・設備などについて、次に示す観点を中心に検討を進めている。

＜検討の観点＞

- 生徒が主体的・協働的に学習する授業への質的転換や高大接続改革など、国での教育改革の方向性を見据えた魅力あふれる教育課程の編成と授業の在り方、生徒会活動や部活動など生徒活動の在り方
- 小・中学校や地域団体をはじめ、地元企業や大学と連携した教育活動の在り方
- 多様な分野において社会で貢献できる人材の育成に向け、生徒のキャリア発達を適切に支援し、多様な進路希望を実現する学校体制と指導の在り方
- 新しい教育活動を開拓するにふさわしい普通教室や特別教室、ICT機器をはじめ、幅広い学習活動や部活動を開拓するための施設・設備や学校規模の在り方

(以下、枠内は基本方針からの抜粋を示す)

## 2 新・普通科系高校の目指す生徒像・学校の基本コンセプトについて

### (1) 目指す生徒像について

基本方針において、新・普通科系高校では「日本が目指す科学技術イノベーション立国を見据えるとともに、塔南高校において教育界をはじめとする様々な分野で活躍する生徒を育んできた教育風土をしっかりと引継ぎ、多様な分野で『社会に貢献する生徒の育成』を学校の最高目標とする」こと、「学校教育と実社会とのつながりを重視した教育活動の下、『国際的な視野を持って主体的に社会に参画し、自立して社会生活を営むために必要な力』の育成を目指した学校づくりを行う」こととしており、目指す生徒像を次の通り掲げている。目指す生徒像を実現するための育てるべき力については、今後さらに具体化・明確化を図る必要がある。

#### 目指す生徒像

- ① 自らの将来像を描き、その到達に至る道筋と達成すべき課題を明確にして、目標の実現に向けチャレンジし続ける生徒
- ② 在校生はもとより、小・中学生や地域の方々等、世代や立場を超えた人々とも積極的に交流し、他者と協働して活動できる力を培い、多様な価値観や生き方を学びながら、自己の成長につなげることができる生徒
- ③ 国際化や情報化の進展する社会において、地域や社会の課題を多角的にとらえる視野を育み、科学技術分野や教育分野をはじめとする多様な分野で社会に貢献する気概を持って、社会的課題の解決や新しい価値の創造に向けて行動し、社会の発展に寄与することのできる生徒

## (2) 学校の基本コンセプトについて

学校の基本コンセプトとしては、3つの柱を掲げており、その方向性や具体案について、例示的に示す。

### ① <生徒が主体的・自律的にいきいきと活動する学校>

学習活動はもとより、生徒会活動や部活動などすべての教育活動において生徒が自発的に、意欲をもって全力で取り組める環境を提供する学校

教師主導ではなく、生徒自らが企画・立案を行い、主体的に取り組む教育活動を可能な限り展開する。生徒の能動的で探究的な学びを促すために、ICT機器を積極的に活用しながら、特色ある課題解決型授業やアクティブ・ラーニング<sup>※1</sup>の充実を図る。また、生徒同士が切磋琢磨し、高め合えるよう、生徒会活動や部活動においても生徒たちがより主体的にマネジメントを行う仕組みを構築する。

※1 アクティブ・ラーニング … 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

### ② <地域に貢献し地域とともに発展する学校>

地域の小・中学校との連携事業を継承・発展させるとともに、地域でのボランティア活動や伝統行事などに生徒が積極的に参画することを通して、地域の発展に貢献するなど、地域と共に歩む学校

多様な他者との関わりを通して地域の発展に貢献するために、ダイバーシティマネジメント<sup>※2</sup>の観点を重視した活動を展開する。地域に愛される学校となるべく、清掃や防犯・防災などのボランティア活動や地域の小・中学校および福祉施設・NPO法人との連携事業を通して、地域の課題を共有し、その解決と新たな価値の創出に向けた取組を推進することを検討する。

※2 ダイバーシティマネジメント … 性別、年齢、国籍、障害の有無といった個人の属性にかかわりなく、多様な人材の能力や発想、価値観を融合することで、組織の活性化を図る手法。

③ <生徒の持つ可能性を引き出し、高める学校>

生徒が成りたい自分を描きながら、夢や希望を持って学校生活を送れるよう、個の可能性を最大限に引き出し、その実現に向けて、一人一人を徹底的に大切にする学校

全ての生徒を個性ある人格として尊重し、生徒の人間的成長にとって有益な学習環境をハード面だけでなくソフト面でも提供することができるユニバーサルデザイン<sup>※3</sup>の学校を目指す。生徒の夢の実現に向けて、キャリア発達を適切に支援できるよう、自己肯定感や自己管理能力を高めることに主眼をおいた教育活動を展開する。その一環として、生徒の可能性を広げるとともに生徒自身が夢を描けるようにするために、科学技術や教育などの分野における企業や大学との連携や海外の学校との国際交流を検討する。

※3 ユニバーサルデザイン … 障害のある人の便利さ使いやすさという視点ではなく、障害の有無にかかわらず、すべての人にとって使いやすいようはじめから意図してつくられた製品・情報・環境のデザインのこと。

### 3 学校規模と施設・設備の在り方

#### (1) 学校規模について

塔南高校においては、京都市・乙訓地域での中学校における生徒数や普通科系高校の志願者の動向を踏まえ、平成28年度入学者選抜における第1学年の募集定員は教育みらい科を含め7学級（280人）となっている。公立高等学校の設置、適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律（昭和36年法律第188号）第4条において、「高等学校の教育の普及および機会均等を図るため、その区域内の高等学校の配置及び規模の適正化にとめなければならない。」と規定されている。京都市・乙訓地域における中学生は今後5年間で概ね850人程度減少が予測されているが、新設高校においては普通科系の高校を想定しており、生徒の能力や個性を最大限に伸ばすために必要な教育課程の編成や講座展開の在り方、さらに特別活動や部活動の活性化を考慮すると、1学年で6学級（240人）程度の規模が妥当であると考える。

#### (2) 施設・設備について

目指すべき新しい教育活動に対応するだけでなく、地域に開かれた施設・設備として、施設・設備の在り方が学校の特色の一つとして発信できるように検討する。

#### ＜主体的・能動的な学びを促す施設・設備＞

探究的な学びを展開するため、アクティブ・ラーニングに適した教室の仕様やラーニングコモンズ<sup>※4</sup>の機能を充実させる。10人程度の少人数から100名程度がプレゼンテーションや交流行事などで活用できる多様な教室を設置するとともに、教室に限らず廊下などの開かれた空間で自由に議論が生まれる環境を整備する。また、タブレット端末等のICT機器を積極的に活用した教育活動を展開するために、校内のWi-Fi環境の整備を検討する。

※4 ラーニングコモンズ … 複数の生徒が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。

#### ＜特色ある教育活動を展開する施設・設備＞

科学技術をはじめとする最新の理数系教育に対応した特別教室や展示スペースを確保し、自然科学に関する資料や標本を充実させることにより、地域の小・中学校の理数系教育の拠点とすることを検討する。また、学習活動や部活動の合宿や海外からの留学生の受け入れが可能となる研修機能や宿泊機能を備えた施設や、全学年が参加可能な発表会やポスター発表等が行える多機能型の施設を検討する。グラウンドや体育館については、「するスポーツ」だけでなく、応援・観戦や地域スポーツの振興などの「観る・支えるスポーツ」を意識した施設・設備の設置を検討する。

#### ＜地域コミュニティの拠点としての施設・設備＞

これまでの洛陽工業高校における地域との連携をより積極的に行えるよう、地域コミュニティの拠点としての機能を充実させる。地域住民や近隣の小・中学生も気軽に利用できるような雑誌・図書の閲覧スペースやカフェテリアなどの施設や、災害時における住民の受け入れや救援物資の備蓄、消防器具の保管などの防災機能を備えた施設・設備の在り方を検討する。

#### ＜時代の変化に対応できる施設・設備＞

変化の激しい時代にあわせて柔軟に変容が可能となる自在性を備えた施設・設備についても検討する。また、一部の施設の維持管理については、民間活力の導入も視野に入れて検討する。

#### 4 教育方針の一層の具体化に向けて

教育は時代を後追いするのではなく、時代の先を見据え、時代に先駆けるものであるべきである。明治5年の学制発布に先駆けて、京都の町衆は明治2年に64の番組小学校を設立した。町衆にとって教育とは、自ら創りだすものであった。新・普通科系高校においても時代の潮流を的確に捉えつつ、市民の期待と要請に真摯に応え、地域とともに築き上げられなければならない。また、京都は1200年を超える歴史の中で磨き上げられた文化と景観が息づく都市である。この豊かな文化資源・人的資源を有する世界文化自由都市・京都において、よりよい未来を創造する市民、国民、国際人を育てる学校となるべく、新・普通科系高校を構想していきたい。

今後も国での教育改革の方向性を見据えながら、教育課程編成や授業の在り方の検討を引き続き進めていく。そのためにも、学校の核となる教育目標やこれからの時代を先取りした特色のある教育方針を定める必要がある。また、あらゆる分野において社会に貢献する担い手の育成に向け、多様な進路希望を実現する学校体制と指導の在り方については先進事例視察などによる調査・研究を進めていくとともに、市民の方々や外部有識者からご意見をいただきながら、教育方針の一層の具体化を図っていきたい。

## 塔南高校 沿革

- 昭和 37 年 11 月 14 日 京都市教育委員会内に新設高等学校準備事務室開設準備事務室長に森 藤吉 就任
- 昭和 38 年 1 月 17 日 京都市教育委員会において新設高等学校設置案可決  
校名を京都市立塔南高等学校と決定
- 昭和 38 年 2 月 28 日 京都市公報に学校設置発表 初代校長に森 藤吉 就任 学則制定
- 昭和 38 年 4 月 6 日 洛陽 伏見両高等学校普通科生徒（新 2、3 年 815 名）受入式
- 昭和 38 年 4 月 8 日 午前：新 1 年生（726 名）入学式 午後：竣工式、開校式
- 昭和 38 年 4 月 15 日 食堂開設
- 昭和 38 年 7 月 3 日 体育クラブボックス完成
- 昭和 38 年 11 月 14 日 第 1 回創立記念式並びに校歌発表会（創立記念日を 11 月 14 日にすることを決定）
- 昭和 38 年 11 月 20 日 渡り廊下竣工
- 昭和 39 年 3 月 7 日 第 1 回卒業式挙行
- 昭和 40 年 3 月 31 日 運動場拡張のため用地 5,228 平方メートル買収調印
- 昭和 40 年 5 月 6 日 文部省教育課程研究指定校ならびに生徒指導研究推進校に指定
- 昭和 42 年 2 月 4 日 文部省教育課程研究指定校ならびに生徒指導研究推進校研究発表会開催
- 昭和 43 年 4 月 1 日 初代校長 森 重吉 洛陽工業高等学校に転出 第 2 代校長 岡本 正二 就任
- 昭和 43 年 5 月 17 日 プール竣工式挙行
- 昭和 46 年 6 月 30 日 体育館竣工
- 昭和 51 年 3 月 31 日 第 2 代校長 岡本 正二 退職
- 昭和 51 年 4 月 1 日 第 3 代校長 北尾 孝義 就任
- 昭和 54 年 3 月 31 日 第 3 代校長 北尾 孝義 退職
- 昭和 54 年 4 月 1 日 第 4 代校長 松本 謙一 就任
- 昭和 55 年 5 月 24 日 新館工事竣工式挙行
- 昭和 58 年 5 月 28 日 創立 20 周年記念行事
- 昭和 59 年 3 月 17 日 校舎大改修 弓道場新設工事竣工式挙行
- 昭和 59 年 3 月 31 日 第 4 代校長 松本 謙一 退職
- 昭和 59 年 4 月 1 日 第 5 代校長 高橋 俊英 就任
- 昭和 60 年 4 月 1 日 京都府公立高等学校教育制度改善（類型制）
- 昭和 60 年 9 月 7 日 食堂改修工事完了
- 昭和 61 年 5 月 10 日 食堂およびグラウンド、テニスコート全面改修工事竣工式挙行
- 昭和 62 年 3 月 31 日 第 5 代校長 高橋 俊英 退職
- 昭和 62 年 4 月 1 日 第 6 代校長 片山 嘉和 就任
- 昭和 63 年 4 月 1 日 第 6 代校長 片山 嘉和 京都市教育委員会に転出  
第 7 代校長 荒木 雅 就任
- 平成元年 10 月 30 日 トレーニングルーム設置工事完了
- 平成元年 11 月 30 日 北校舎トイレ改修工事完了
- 平成 3 年 3 月 31 日 第 7 代校長 荒木 雅 退職
- 平成 3 年 4 月 1 日 第 8 代校長 橋口 義弘 就任

平成4年4月7日	東館竣工式挙行
平成4年11月2日	京都市教育委員会より教育功労者表彰を受ける
平成5年9月24日	創立30周年記念式典挙行
平成6年3月31日	国公立大学現役合格者数が74名で京都府公立高校全体のトップとなる
平成6年8月31日	校舎大規模改修完了
平成7年3月31日	第8代校長 樋口 義弘 退職
平成7年4月1日	第9代校長 蔭山 薫 就任
平成11年9月22日	本館および体育館大規模改修工事竣工
平成11年11月24日	プール新築工事竣工
平成12年8月31日	物理教室、準備室大規模改修工事竣工
平成13年9月5日	化学教室、準備室大規模改修工事竣工
平成13年10月29日	文部科学省より「総合的な学習の時間」に関わる調査研究校に指定
平成13年11月6日	京都市教育委員会より教育功労者表彰を受ける
平成14年3月31日	第9代校長 蔭山 薫 退職
平成14年4月1日	第10代校長 西村 泰治 就任
平成14年9月5日	「京都市スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける
平成15年4月7日	普通教室全室にクーラー設置
平成15年7月10日	「学力向上フロンティアハイスクール」の指定を受ける
平成15年11月14日	創立40周年記念講演および祝賀会
平成16年1月30日	創立40周年記念誌 ~ここ十年の歩み~ 知性 誠実 世界の文化 発行
平成17年4月1日	第10代校長 西村 泰治 洛陽工業高等学校に転出 第11代校長 明尾 恵 就任
平成18年4月1日	教育みらい科準備室開設
平成19年4月7日	教育みらい科設置1期生入学
平成19年7月26日	新グラウンド完成
平成21年3月31日	第11代校長 明尾 恵 退職
平成21年4月1日	第12代校長 仁科 周博 就任
平成22年3月1日	第47回卒業証書授与式挙行 教育みらい科1期生卒業
平成24年11月24日	創立50周年記念式典挙行
平成25年3月1日	第50回卒業証書授与式挙行
平成25年3月31日	第12代校長 仁科 周博 退職
平成25年4月1日	第13代校長 古池 強志 就任
平成26年4月1日	教育みらい科1期生 教員新規採用